

毎日の「確認テスト」で完全定着を図る

吉良 メデュカパスで印象に残っていることを聞かせてください。

大原 「分かったつもり」と「実際に解ける」との間には、かなり大きなギャップがあります。ですから、受験勉強では、「やりっ放し」にせず、授業で学んだことを確実に消化することが大切です。けれども、単に自分で復習するだけでは、どの程度定着したのか分からず、不安なものです。メデュカパスは、学んだことをしっかりと定着させるシステムを導入しており、その不安を払拭することができました。毎日、「確認テスト」

があり、間違えた問題はもう一度自分で考えて、それでも分からない場合はすぐに先生に質問し、ときには先生に出してもらった類似問題を解きます。そうやって、同様の問題なら完璧に解けるレベルまで仕上げていくわけです。学んだ内容が確実に定着していく手応えが得られました。

吉良 「確認テスト」は、月曜日から金曜日まで、授業終了後の50分間（1日1教科）実施しています。前週の授業で学んだ内容を出題し、本当に理解できているかをチェックするテストです。さらに、記憶が薄れかけた翌週土曜日の午前中に、「確認テスト」で間違えた問題をやり直す時間も設けています。

面接や入学後にも役立つ「Input-Output方式」

大原 「Input-Output方式」の授業も楽しみにしていました。私は模試などで間違えた問題や、自分が苦手な単元の問題を取り上げていました。

吉良 3〜4名の生徒の前で解法を発表する授業ですから、得意な単元を取り上げる生徒が多いわけですが、あえて苦手な単元を選んだ理由は何ですか。

大原 苦手な単元の勉強は避けようとしがちです。「Input-Output方式」の授業で発表すれば、否応なく勉強することになると考えたのです。私の説明が曖昧になると、他の得意な生徒からフォローしてもらいうこともあり、考え方の幅が広がりました。

吉良 他の生徒に教えることで、脳の別の部分が活性化し、理解が進む効果があります。また、2次試験の面接やグループ討論にも役立ちます。話すのが苦手だった生徒が、年間50回近く、他の生徒の前で発表する経験を通して、的確に受け答えできるようになったという声が聞かれます。

大原 私も、人前で話すのが極端に苦手なタイプでした。昭和大学医学部の面接は、目の前に3〜4名の面接官が並び、相当な圧迫感がありま

す。現役のときは、まったく話すことができず、落ち込みました。1浪後は「Input-Output方式」の授業のおかげで、自分の考えがきちんと言えるようになり、とても大きな効果だと感じています。さらに、入学後も役立っています。医学部ではアクティブ・ラーニングの授業が豊富だからです。たとえば昭和大学では、将来のチーム医療に向けて、歯学部、看護学部との合同PBLが行われます。初対面の学生といきなりディスカッションするのですが、そんなときも臆せず自分の意見が言えるようになっていきます。

確認テストで出題された問題が入試で的中

大原 オリジナルテキストで学んだことも良かったと思います。市販の参考書・問題集は、一般的な学力を高める意味はあるでしょうが、正直なところ、私立医学部では出題されないような問題が中心です。同じ医学部でも、国立と私立では出題形式がまったく異なります。国立は記述式主体で、じっくり考える力が求められるのに対して、私立は短時間で大量の問題を解く必要があり、解くスピードが勝負の分かれ目なのです。私立医学部に特化したオリジナルテキストで、速く解く力を高めたことが、合格につながりました。

吉良 オール記述式の国立医学部なら、1問に30分かけてもいいのです

高い合格実績につながる 私立医学部に特化した授業と繰り返し定着を図るシステムが



メデュカパス卒業生
(昭和大学医学部2年)

大原 三佳さん